

ひきこもり当事者・経験者の つながりに関する研究

——個人と社会の間における中間的共同体に着目して——

田添 貴行

[キーワード：①ひきこもり ②不登校 ③当事者コミュニティ]

問題と目的

ひきこもりは、修学や就労、家族以外の人との交流といった、社会参加が長期にわたり失われており、自宅中心の生活が続いている状態をさす。ひきこもりに至るプロセスや状態像は多岐にわたり、「均質な状態像や人口集団という考え方になじまない」（川北，2006）といった指摘もなされている。また、近年では、ひきこもる人々の高年齢化が報告されている（例えば池上，2010；2014）。

ひきこもり当事者の支援の内容も様々なものがあり、中村・堀口(2008)は、荻野(2006)の知見を引用しながら、民間支援団体で実際に行われている支援内容について、「訪問活動、居場所運営、就労支援の3段階に加えて、親への対応」としてまとめている。そうした中で居場所支援は、対人関係の獲得をめざし、その充実と安定をはかる目的で、フリースペース、デイケア、居場所などという名称で呼ばれる場所をひきこもっている当事者たちに提供する(浅田(梶原)，2010)。こうした居場所は、ひきこもり当事者に「安心」を提供する(忠井，2006；中村・堀口，2008)と指摘される一方で、同時に当事者が居場所に止まることが問題視されたり(金城・長富・田中，2004)、「いかにして押し出すか」(中

村・堀口, 2008) といった議論もなされている。そして、こうした居場所をどうとらえるかということについて、「社会参加の入り口」(斎藤, 2012) のように、居場所の目的を社会参加としてとらえる支援者も存在する(例えば宮西, 2014)。

その一方で、石川(2007)は、ひきこもりから回復するとは、「就労および経済的自立の達成、さらには対人関係の獲得まで含めて〈社会参加〉と称されるものを果たすことではなく当事者一人ひとりが自分の生を肯定し、納得すること」とした上で、「自助グループや支援団体は、このような内的作業をうながす〈居場所〉としての意義をもっている」(石川, 2008)と述べている。更に、住田(2003)の議論に示唆を受けながら、「ある空間が〈居場所〉として成り立つためには、その外部では貶められる一方でしかない存在が受容・承認されなければならない。つまり〈居場所〉には、社会における支配的な価値観への対抗という側面もあるのだ」(石川, 2008)と指摘している。

ひきこもり当事者の居場所ということに関連して、当事者・経験者自らが集うことで、自助グループなどの相互交流を目的としたコミュニティが形成されている(例えば池上, 2014; 照山・堀口, 2014)。このようなコミュニティには、単なる社会の中の居場所として機能するのみではなく、ひきこもり当事者・経験者における独自の価値観や役割が存在するものと考えられる。また、そこには社会に対する新たな視点や現在の社会に困難を感じる人々の生き難さを軽減するヒントが内包されている可能性も考えられる。

更に、行政が設置する支援機関、例えば地域若者サポートステーションや東京都ひきこもりサポートネットは、サービスの利用に当たって年齢制限が設けられている場合もある。そうした点においても、ひきこもり当事者・経験者が自ら形成するコミュニティの存在に積極的な意義が見出される。

上記のように、本研究では、ひきこもり当事者・経験者自らが個人と

社会との間に作る中間的なコミュニティに着目して、そうしたコミュニティに内在する価値観や機能について調査・検討することを目的とする。

方法

1. 調査協力者

不登校・ひきこもり情報誌「今日も私は生きてます。」編集部に参加する20～30代の4名（男性2名，女性2名）に、インタビュー調査を実施した。この情報誌は、不登校やひきこもりの当事者9名により、2014年5月に創刊されている。「いつでも開いている居場所が欲しい、相談場所を作りたい、訪問支援をしたい、とにかくお金が欲しい、自分らしく働ける職場が欲しい…。人それぞれ、様々な想いの中から生まれたもののひとつがこの冊子」（「今日も私は生きてます。」編集部，2014）とされている。誌面には、当事者の手記、支援団体へのインタビュー、生活に役立つ情報など、様々な不登校・ひきこもり情報が掲載されており、2015年4月の段階では、第2号まで発刊されている。また、これらの情報誌は編集部のメンバーの手により販売されている。

2. データの収集

2015年4月、「今日も私は生きてます。」編集部において、4名全員を対象として半構造化面接を行った。今回の調査では、コミュニティについて検討することを主な目的としたため、4名同時にインタビューを行った。面接内容は、同意を得た上で、ICレコーダーに記録した。そして、筆者自身が逐語録として文章化したものを分析用データとして用いた。

結果と考察

編集部メンバーの発言は〈 〉で表記する。

メンバーが集まる経緯

〈基本的にどこかの居場所なり団体なり、個々人の居場所と結びついて集ったというのがスタートの形〉ということであった。編集部のメンバーはそれぞれ地域のフリースペースや親の会といった、既存のコミュニティに参加していた経験があり、そうした〈コミュニティの中での付き合いがあった〉ということであった。〈全く全員を知らないという人が来るというのはなかった〉というように、各メンバーは誰かしら知人のいる状態で参加していたとのことであった。つまり、〈情報誌自体は用意された場ではなくて自分たちで作った〉が、〈最初はみんなそういった集まる環境ってというのがあった〉ということであった。

綾屋(2010)は、同質の仲間で作られたコミュニティに関して、「シェルター的な役割を果たす」としている。そして、その中で潜在的なマイノリティは、「これまで抑圧されてきた自分の感覚を承認され、自分が何者なのかを把握していくことができる」としている。このように、自分の経験を他者と共有し、認め合える場と出会うことは、新たな主体を形成することに寄与しているようにも考えられる。また、先ずはそうした居場所・コミュニティにつながるものが、新たな集団や活動を発展させて上での基盤となるように思われる。

更に、編集部のメンバーに関して、直接会ったことはないけど、他のコミュニティの内部で存在を知って、協力をお願いすることで作品を提供してくれた人もいたという。他にも、地理的条件、交通網などの移動に関わる要因により、直接会ってやりとりするのが難しいメンバーもいるという。当事者・経験者のつながりを考える上で、こうした地理的条件や地域の特色も視野に入れておく必要があると思われる。

当事者・経験者のつながり

編集部のメンバーは、お互いのことについてよく知っているかという、そうでもないという。〈過去をさらけ出すっていうのと現状を話すつ

ていうところでは、違いが結構大きいと思う」という語りもあった。「今仕事をしていてしんどい。辞めたい」ということが現状の話であり、〈出会う前にもそれぞれ何か抱えているものとかやっぱりあっただろう、っていうのは何となくあるけれども〉、〈本来相手が苦しかったこととか、聞くことっていうのは、まあそんなに楽しいことではないし、話す方もやっぱりものすごく大変だから〉ということであった。

そして、情報誌を出してから、〈連絡先が載っていたりするもので、つながれるようになったところが結構ある〉ということで、〈全然知らない人とつながれるようになった〉ことも、〈思い返したら結構多い〉とのことであった。それに関連して、〈当事者に会えるのが好き〉という語りもあった。〈不登校をしてたっていうだけで、変だけど、安心感が結構あって〉ということであった。

また、居場所の利用に関して、〈自分をオープンにして尚且つそこを受け止めて貰える場所みたいところで、すごい救われていると思うし、だからこそ自分の経験を語っても良いかな、っていう風に思えるようになって〉という語りもあった。

照山・堀口（2014）は、発達障害者の当事者コミュニティと比較した上で、「ひきこもり当事者はより根本的なレベルでコミュニケーション、労働のあり方を問い、社会で生きていくうえでの内なる葛藤を抱えており、そうした葛藤について共有したいという点で異なる」と述べている。また、石川（2008）は、「引きこもっているすべての人が、一様に当事者になるのではない。周囲が『ひきこもり』だとラベリングしても、その人が必ず『ひきこもり』の集まりに出てくるわけではない。自分を『ひきこもり』だと認めることがプラスに働くという判断や直観（少なくともマイナスにならないという感覚）、かつその集まりで何かを得られる見通しがまったくもてなければ、当事者としてその場に居ることを選んだり（選び続けたり）はしないだろう」と述べている。これらのことを考えると、ひきこもりの当事者・経験者のつながりにおいて、経験の共

有を通して得られる安心感が一つの要因または動機づけとなっているように思われる。また、他者を傷つけることや他者の痛みに対して敏感な感受性もそうしたつながりにおける媒介として必要となって来るように思われる。

コミュニティの価値観および方向性

先述した通り、メンバーはそれぞれが所属する既存の居場所において知り合った。そうした居場所にはそれぞれ、〈スタイルとかカラーがどうしてもある〉という。そして、〈そこに寄って来ている人間が基本的にメインメンバーでやっているから（価値観が）大きく逸れるということとは滅多にない〉ということであった。また、ひきこもりなどの〈ある種限定されたことに対する価値観はある程度は共通しているから本にすることができる〉のであり、〈共通した価値観というのは基本的に安心感にはつながっている〉という語りもあった。価値観として具体的に語られたのは、〈暗いものが好き〉、〈プラス過ぎるものとか強いものとかに否定的〉といった内容に加えて、〈解決策は絶対載せない〉ということが語られた。それについて、「解決」や「克服」というものは、〈絶対個人個人で違うから〉そもそもそういう方法がないという見解もあった。また、親の視点を考えた時、〈(不登校・ひきこもりを)解決したいと思うのは当たり前ですけど、それはあくまで親の感覚〉であり、解決策について、〈懐疑的などころがある〉とのことであった。そして、〈親が思う解決と当事者が思う解決は多分全然違う〉というように、編集部のメンバーは、当事者・経験者としての視点に立つことを前提としていることが伺える。それに関連して、情報誌は、〈あくまで当事者なり経験者なりの声を載せるもの〉であり、〈当事者・経験者の方から見たものを載せる〉ものということであった。このように、外部からの視点との相違により当事者・経験者としての価値観や方向性が差異化、明確化されるように思われる。そこにおいても、やはり経験やそれに対する見解を

共有し得るか否かということが一つの軸となっているようにも考えられる。

情報誌に関して、情報を発信する相手は当事者を想定しているという。例えば、媒体として雑誌を敢えて選んだのも、〈部屋から出て来ない人とかがこっそり降りて来た時に、何となくテーブルの上に置いてあるのを目指すため〉というように、いかにして当事者に届けるかということが考えられている。そして、そのためには、親や支援者を挟むことが現実的であると、最初から構想していたとのことであった。その点について、〈親御さんも見るようなものもちゃんと入れていかないといけない〉とする一方で、〈親のためのメッセージをこめたつもりは一切ない〉という語りもあった。

当事者に届けるということについて、親がテーブルの上に乗せておいた情報誌を当事者が読んで、その後親が当事者の破った情報誌を見つけることを想定した時、それは〈理想的〉であるという語りもあった。〈破るってことは読んだってことだから、それはもうすごいと思う。読んでリアクションするっていうのはすごい。読むだけでもハードルが高いのに〉ということであり、〈お礼の手紙が来るのも、破くのもそんなに変わらない。出し方が違うだけで〉という語りもあった。その一方で、情報誌は、〈本当に人を傷つける可能性をものすごく含んでいると思う〉、〈当事者の生々しい言葉は、やっぱり経験のある人にとっては、ものすごく刺さる場合があるから〉ということも語られおり、〈故意に傷つけるつもりは一切ないけど、本当にこれを読んで傷つくくらいだったら、読まずに破り捨てた方がよい〉ということであった。そして、〈いかにして傷つけないようにするかはやっぱり慎重になる〉ということであった。この点について、〈救われる人がいることは本当に嬉しいし、そういう声を聞いた時は素直に嬉しいけど、救われた人がいる反面で、傷ついている人がいるであろうっていうのは、常に考えてます。そういう価値観はきっと経験者が集まったならではのものだと思います〉とのこと

であった。また、〈情報誌自体も居場所というか交流の場だから、多くの当事者・経験者が集まれるような場では、やっぱりお互いになるべく傷つかないように、っていうのは暗にあると思う〉という。こうしたことから、同じ経験を有する者として、同じ立場の相手の痛みに敏感であると共に、個としての他者や多様性を尊重するという方向性があるように考えられる。また、当事者・経験者同士がつながるといことは、同じ経験を持っているからこそつながれる反面、互いの経験に敏感にならざるを得ない故に他者の言葉に傷つく可能性も秘めているともいえる。

居場所としての情報誌 ―コミュニティの機能―

情報誌に当事者の声を載せるということについて、〈不登校とかひきこもりで今悩んでいる人に上手に不登校して欲しいし、上手にひきこもりをして欲しい、っていう思いがあって〉という語りがあった。それは、〈よく言われるけど、そういうことで苦しんでいるのは私一人なんじゃないかっていう感覚が強かったりする〉ため、「そんなことないよ」って、「周りにもそういう風に悩んでいる人いるよ」っていうことを先ず知ってもらおう。そして、周りにそういう人がいるんだったらどうやって不登校をしていたり、どうやってひきこもりをしていたり、どうやって過ごしているのか、っていうのを知れる機会になる。要は外に出なくても知ることができる〉ということであった。そうした思いの背景として、〈こういう自分でどうやって生きていけば良いのかっていうのが本来悩むべきこと〉であり、〈色々な人の経験とかやったことを知ることで色々な選択肢が出て来る〉という意見もあった。

綾屋・熊谷(2010)は、「多様性の承認されたコミュニティにおける、理想的な『言いつばなし聞きつばなし空間』においては、自分とは異なるさまざまなまなざしや考え方に触れることになり、おのずと自分の世界の捉え方や考え方が相対化されていく」としており、「さまざまな角度から複眼的に、自分を捉えられるようになる」としている。また、岩

田（2010）は、セルフヘルプグループの一般的な機能の一つに、「体験的な知識を形成、蓄積、伝達する」というものを挙げており、体験的な知識について、「第1は、自分たちの問題に対する認識に関する知識、第2が、自分たちの問題に対処する方法に関する知識、第3が、自分たちに対する知識」としている。情報誌は互いの顔が見えない分、そこでのコミュニケーションは、〈希薄でもあり、濃密でもある〉とのことであったが、当事者・経験者が、実際にコミュニティに参加せずとも、他者の視点や体験に触れることができると共に、セルフヘルプグループのように、体験的な知識を伝達し合うことができるものと思われる。そして、自分自身の生き方や外部の価値観について俯瞰して考える契機を提供するものであるように考えられる。

また、コミュニティにおける他の機能的側面に関して、〈今カテゴリ的には無職になるのかもしれないけど、この情報誌があるからあまり罪悪感を感じなくていいかなって〉という語りもあった。竹中（2009）は、ひきこもり当事者の支援において、「『働き方の視点の変革』が必要である」と指摘しており、「『働き方の視点の変革』とは、端的に言えば、雇用型の就労だけでなく、多様な働き方の検討（ボランティア活動、家事・家業手伝い、その他）を考えることである」としている。ひきこもり当事者において、就労や社会における主要な価値観、例えば「普通」とされるものと現状との間に葛藤が生じることは多々指摘されている（例えば、池上，2014；石川，2007；岡部・青木・深谷・斎藤，2012；照山・堀口，2014；梅林，2011など）。情報誌の活動において、〈前の職場で得たことをここで活かせる〉という語りもあり、こうした中間的なコミュニティにおける活動が個人の活動の多様性を受容または保障する場となることで、内的葛藤を緩和する効果も生じるのではないかと考えられる。

編集部メンバーは今後、ひきこもり経験のある作家を呼んで講演会を行うことも考えているという。その際、お茶やお菓子を出すことを通じて、人を迎える、触れ合える、という語りもあった。情報誌を通じて

つながりが少しずつ広がっていくことで、また新たな試みや可能性も生じてくるのではないかと思われる。

おわりに

本研究では、ひきこもり当事者・経験者自らが個人と社会との間に作る中間的なコミュニティに着目し、そこで共有される価値観やその機能について検討を行った。その際、不登校・ひきこもり情報誌「今日も私は生きてます。」編集部を事例として取り上げた。その結果、ひきこもりの当事者・経験者において、経験の共有を通して得られる安心感がつながりの要因や動機づけとなっていることが示唆された。また、それに関連して、他者を傷つけることや他者の痛みに対する感受性はその媒介となることが示唆された。そして、コミュニティの機能的側面に関して、情報誌という活動を通じて、当事者・経験者における互いの体験的知識が共有されることが示唆された。また、個人の活動における多様性を受容・保障することにより内的葛藤が緩和されることが示唆された。

こうしたコミュニティに関して、全国的に見た場合、地域によって多様な形態があるように考えられる。そうした多様性は、当事者・経験者それぞれのニーズを反映していると考えられる。また、地域差といった環境的要因もまた大いに関係しているように思われる。そうしたコミュニティの個性やそこでの人のつながりを深く検討し、また、他のコミュニティのあり方と比較検討することで、それらに対する重層的な理解が可能となるように思われる。また、そのようなコミュニティで生きる個人の心理にも同時に着目していくことも重要であるように思われる。

謝辞

研究に参加して下さった、編集部メンバーの皆さんには、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

引用文献

- 浅田(梶原)彩子(2010). ひきこもり当事者の「居場所」支援に関する分析 一族・当事者・支援者の視点から 奈良女子大学人間文化研究科年報, 25, 193-203.
- 綾屋紗月(2010). 仲間とのつながりとしがらみ 綾屋紗月・熊谷晋一郎(著) つながりの作法 一同じでもなく違うでもなく NHK出版
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎(2010). つながりの作法 綾屋紗月・熊谷晋一郎(著) つながりの作法 一同じでもなく違うでもなく NHK出版
- 不登校・ひきこもり情報誌「今日も私は生きてます。」編集部(編)(2014). 不登校・ひきこもり情報誌「今日も私は生きてます。」創刊号. 不登校・ひきこもり情報誌「今日も私は生きてます。」編集部
- 池上正樹(2010). ドキュメントひきこもり ―「長期化」と「高齢化」の実態 宝島社
- 池上正樹(2014). 大人のひきこもり 一本当は「外に出る理由」を探している人たち 講談社
- 石川良子(2007). ひきこもりの〈ゴール〉 ―「就労」でもなく「対人関係」でもなく 青弓社
- 石川良子(2008). 「ひきこもり」の当事者は〈居場所〉で何を得ているのか 萩野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎(編著) 「ひきこもり」への社会的アプローチ ―メディア・当事者・支援活動 ミネルヴァ書房
- 岩田泰夫(2010). セルフヘルプ運動と新しいソーシャルワーク実践 中央法規
- 川北稔(2006). ひきこもり支援の課題と展望 ―社会規範を解きほぐす居場所の実践から 忠井俊明・本間友巳(編著) 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 金城隆一・永富奈津恵・田中俊英(2004). 「ひきこもり」議論がうっとうしい 月刊少年育成, 581, 8-27.
- 宮西照夫(2014). 実践 ひきこもり回復支援プログラム ―アウトリーチ型支援と集団精神療法 岩崎学術出版社
- 中村良孝・堀口佐知子(2008). 訪問・居場所・就労支援 ―「ひきこもり」経験者への支援方法 萩野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎(編著) 「ひきこもり」への社会的アプローチ ―メディア・当事者・支援活動 ミネルヴァ書房
- 萩野達史(2006). 新たな社会問題群と社会運動 ―不登校・ひきこもり・ニートをめぐる民間活動 社会学評論, 57, 311-329.
- 岡部茜・青木秀光・深谷 弘和・斎藤 真緒(2012). ひきこもる若者の語りに見る“普通”への囚われと葛藤 ―ひきこもる若者へのインタビュー調査から

- 立命館人間科学研究, 25, 67-80.
- 斎藤環 (2012). ひきこもりの理解と対応 斎藤環・畠中雅子 (著) ひきこもりのライフプラン —「親亡き後」をどうするか 岩波書店
- 住田正樹 (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文 (編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会
- 忠井俊明 (2006). ひきこもりというアポリア 忠井俊明・本間友巳 (編著) 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 竹中哲夫 (2009). ライフステージに対応したひきこもり支援 —「ひきこもり状況」と支援課題 日本福祉大学社会福祉論集, 120, 1-30.
- 照山絢子・堀口佐知子 (2014). 発達障害者と「ひきこもり」当事者コミュニティの比較 —文化人類学的視点から 鈴木國文・古橋忠晃・ナターシャ・ヴェルナー 「ひきこもり」に何を見るか —グローバル化する世界と孤立する個人 青土社
- 梅林秀行 (2011). 内的葛藤としてのひきこもり 臨床心理学, 11, 374-379.

Research on Relationship between Individuals Who Experienced Hikikomori :
Focused on Intermediate Community between Society and Individuals

TAZOE, Takayuki

This research focused on intermediate community between society and individuals who experienced hikikomori. I conducted group interview with members of a group issues the information magazines of school refusal and hikikomori. As a result, it was suggested that sense of security obtained through sharing of experiences of school refusal or hikikomori is factor and motivation in their relationship. Also, it was suggested that their sensitivities to hurting others and other's pain mediate their relationship. As regards the function of this community, it was suggested that members of the community can share their experiential knowledge through the information magazines. Also, it was suggested that the activities of editing and selling the magazines moderates their internal conflicts.

(心理学専攻 博士後期課程 2年)